

## 伊勢湾台風 50 年

9月26日は戦後最大の被害となった伊勢湾台風から50年が経つ。今から半世紀前の巨大台風は上陸時の中心気圧929hpa、最大風速は伊良湖で45.4m/秒、名古屋港の高潮は389cmで観測史上1位である。死者・行方不明者5098人、住宅全壊4万838棟、浸水36万3611棟にのぼる。こうした数字より、中日連載「濁流の記憶」などの証言が生々しい。写真は1959年10月8日に撮影された集団避難し、明日の晴天を祈る児童たちである(27日付)。毎日連載「継ぐあの日」は1417人と最も犠牲者が多かった南区の白水小学校で保管されていた被災直後の児童らによる1711通の作文を紹介しているが、「あの夜」のことが重く伝わってくる。



名古屋市は惨禍の日から1年半後に、『伊勢湾台風災害誌』(総務局調査課編)を刊行した。まえがきで「いま、ここに伊勢湾台風の惨害の実態と、そこにくりひろげられた救助・復旧のすがたを明らかにし、これを永く記録にとどめ、もつて無災害都市建設のみちしるべの一端とするべく、伊勢湾台風災害誌を編さんした」と述べている。443ページの災害誌から、台風の凄まじさと困難をきわめた救助・復旧を知ることができる。名古屋市では26日の昼12時半頃から風速10mの風が翌27日2時まで12時間以上にわたり吹き続け、20m以上は18時から約5時間以上、30m以上は21時から1時間半吹き続けたと記されている。

当時、わたしは小学4年で、土曜なので昼頃に下校した。すでに風速10mの風が吹いていたわけだ。大きな台風が名古屋に来るといっているので、早めに夕食をすませた記憶がある。レポートにもかつて記したように、千種の国鉄(鉄道)官舎に住んでいた。長い廊下や共同洗濯・トイレがある木造2階建てで、わが家は2階の風当たりが強いところに位置していた。夕方以降だんだんと風雨が激しくなり、母と兄と一緒に割れそうな窓を必死に板などで押さえていた。あちこちで窓が割れる音が響くなか、わが家の窓が割れると屋根も吹き飛ばすとのことで、近所の人も手伝いに来てくれたようだ。風は21時から22時半頃がピークのようなのだが、風向きが変わり、急いで別の窓に向かった。

幸いなことに、水の被害は免れたが、とにかく長時間にわたる風の恐怖を実感した。親父は名古屋駅の近くで、ある「事情」で帰れなくなった。台風の話になると、必ず亡き親父のことが話題になる。そんな50年前のことを思い出した9月26日であった。

(2009年9月28日 記)